爭議の起りし時、此寄付帖が有力の證左となり藻原寺の勝訴に歸したりとて、帖の楮尾に千葉縣裁判所の證據書類の號付と檢印が押してある）

『金綱集』と其裏打の古文書。

『金綱集』は日向上人の御筆にして、本書十餘卷あるもの、是れは『私集最要文』の如きものにして、諸宗の要義を集錄したる書物である。藻原山には六七の二卷がある。卽ち眞言と禪宗とに關する法門を書きたるものである。身延山にも何卷かあり、堀內妙法寺にも何卷かあるさうだ。全部皆日向上人の御筆蹟らしく思はる。實に宗門に取りては尊き書物である。夫の刊行會にて「六老集」を纂輯する時は、先づ以て是等の珍書を刊行したらよからうと思ふのである。而して金綱集の裏打にしてある古文書が實に又尊きものである。余の今回藻原寺詣での重なる目的は、此古文書を拜觀せんがためである。此古文書は南部氏一族始め、聖祖門下の御人々が夫の元弘建武の際、躬親しく上洛して匪躬の忠節を效し王事に勤勞した當時の報告書通信狀とでもいふべき書牘であるから、立派な南北朝記事の史料に採るべきものである。先年故重野博士が修史官たる當時、古文書取調のため藻原寺へ登山し、此裏打の古文書を一讀して、痛く驚喜し、有力なる史料として採用され、夫より今の大學の史料編纂課の史學者の人々も、此古文書に著眼し、遂に公文を以て大學へ差出方を命し、全部を寫錄したる上、其磨滅等を慮ばかりて、裏打の上に更に薄美濃を以て張り大切の取扱をして、之を寺へ返付された。故に金綱集の裏打は二重になつてるが薄美濃は大學で保存のためにしたのであるそうだ。此古文書を以て金綱集の裏打にしたのは日秀上人であるといふ寺傳なれども、其れは疑問である。しかし其裏打にしたのは頗る古きものだらうと思はる。特に金綱集の裏打にしたといふに就ては尤も意味のある所にして、決して偶然無意味のものではなからう。少くとも左の兩意が存してると認めるのである。

一、特に金綱集の裏打として永久傳存を計る事。

一、斯く裏打にして置いたならば濫りに世上に露顯せざる事。

當時へ溯りて一考する時は、其時代の境遇として事情として、此二樣の用意なかるべからざることを知るのである。特に世上に露顯するといふことは尤も忌む所であらうと思はるるのだ。而して此金綱集は本、身延山に傳りてあつたのだが、天文十七年の比、藻原山の歷代日擧上人が夢に感得して身延より持來せりとの寺傳である。蓋し此裏打にしたのは誰れ人なるや不明なれども、其當時の人の手になりたるものにして而も此兩意の存するも

のありてこそ、日譽上人の「若於夢中但見妙事」の神秘的事實に活氣を添へるものなれと思ふのである。

此裏打の古文書たる尺牘は、全體で二十四枚ありて張付がしてある十通程の手紙である差出人と宛名を書きたる上封は、上封として矢張り裏打にして一々保存してある。唯古文書であるから仲々讀みにくき上に、文字不明又は闕失の箇所も多々これあり、頗る困難した。大學の編纂課の人達の嘗て寫讀したのを參照して、稻田君等三人で、讀める限り讀んで見た。編纂課の人達も餘程苦心したらしい、參照して大に發明した點々もあつたが、隨分誤讀した所もあつた。しかし流石は史學者丈によく讀んである所がある。所謂「史眼如炬」と敬服せざるを得ないのである。上封には

進上　出雲殿御返事　源武義
進上　出雲殿　源實義狀
進上　出雲公御房　源長行（進上の右脇に「ミノフサハヘマイラセサセ給ヘシ」と書いてある）
進上　出雲公御房　源長行狀（右脇書あり同前）
進上　イツモドノ御房　妙寂上
進上　出雲殿御返事　源行經狀
進上　大夫殿藤原規〇ク　三井〇不明三郎
身延山久遠寺御坊中
進上　筑前　僧日〇ク
進上　出雲殿　源武光（右脇に「到來元弘元八月六日申尅」としてある）
謹上　二位殿御返事　進上　僧日樹
進上　出雲殿　源長行（右脇に「ミノブサハヘマイラセサセ給ヘシ」と書てある）
進上　出雲公御房御中　釋日澄上

思ふに此武義、實義、長行、行經、武光等の人人は無論南部氏の一門にして、又聖祖門下の御人々であらうが、其系脈が分明ならざるものあれば、之を何かで取調べて見たらば更に妙味を發見するであらう。又是非とも其系脈を取調べるの必要があるが、是れは別問題として研究して見ようと思ふのである。

偖て其尺牘中にて尤も重要にして有力の史料とも稱すべき古文書なるものは、左の篇で

ある。之を讀一讀し來る時は如何に當年聖祖門下の御人々が忠節を王事に效されたかを想像することが出來、轉た欽仰の念に堪へざる事である。……

雖然明春者必定可致急速參上

一二品親王御遠流定披露候歟御供奉被召籠候處日記先度令進候間備御覽候ヌラン此人々今月十三日　於六條河原被切候言語道斷之事令見物凡衆者何レモ大方ノ事ニ候中ニ南部次郎殿最初ニ被切候コソ　都テ目モアテラレスナニ〳〵イテヽ候親タクウキ作法見聞仕候哉ト覺テ候ケレハラ殿御心中察申候九日ヨリ京中以ノ外騷動候阿カ河ニ朝敵充滿シ山崎ヨリセメイリ候間宇カ宮赤松入道ニ賜打手早速追返候了仍仁定寺ニ搆城墎引籠候ヲ宇カ津宮ツイテ責取卽昨日十五日打落頸其數令持參候　是レ大塔殿御所爲ト申其外京中處々ニシホシ召捕人數難及言語禪僧二人押寄〳〵在々處々御共ノ雜談息近サコソ被思出候ハヽイヨ〳〵徒然モマサリ心モウカレ候ワント被案候　如此捧巨細ノ狀候條取籠無申自然○至ニ候可有御免候千日殿秋山內裏門前ニシテ對面之時伯耆律師御房自鎭西上候テ是ニ御座候ト申候ヘハヨモ無存候間不及遂面謁候

一下山之南方闕所ニ治定候テ或ハ壁書ニヲシ或ハ恩賞ノソミ申人々多ヶ御事隨分歎申候罷過候上〻存コトハ此方々ハヨモ思召候ハヽ自然事モ候ハヽ謗法之地ト成候ハン事悲敷覺候一人モ被誘候ハヽ闕所タルマシキ由ヲモ申聞安堵ヲモナト不被申義ト存候愚身等カ一族ノ中ニモ申者多其中ニ緣者コソ多候ヘトモミナ謗法者ニテ候間下山ノ方々ニオモハク存候所存ナク候此段ハ御在京之時モ大方令申候存候但○世習ニ候ヘハ愚身カ名字○ハ可預御穩密候歟但又訴訟何モサシナク連候ハン事候又アリカタク候人々申候事ハ如此々々恐惶謹言

十二月十六日　僧日○（久矢）

此尺牘は帝大の史料編纂課にも夙に寫取されてある。そうして左の如く附記してある。「二品親王。卽尊良也。尊良遠流。大塔宮起兵。此書狀ハ元弘二年十二月十六日也」。下に久米と檢印がある。卽ち易堂久米邦武氏にして當代の編輯官たり。此人嘗て「神道は祭天の古俗」といふ一論文を公にして、一時大に神道者流の物議を來した程の快活なる史學者である。又、南北朝時代史にも此書狀を引用してある。時代史に據るに、尊良親王は後醍醐天皇第一の皇子にして、元弘二年三月八日土佐に配せらるとあり。南部次郎殿とは實

長公の孫に當るといふ説もあれど、錄内、地引御書南部六郎宛の「次郎殿等の御兄弟親の仰せと申し」の文等に據りて推測するに、次郎殿は南部六郎實長公の一子にして孫にはあらざるかと思はる。又楮尾の署名を日静と讀たる人もあるが、本書日字の下は闕失して居るから、静とは讀みかたし。蓋し次篇に明了に日静とあるより類推して此も日静と讀たるならんが、是等は更に檢考を要すべきである。赤松入道とは赤松則村入道圓心ならん。史に「赤松圓心起二播州一」といふもの是れなり。しかも其兵を起したのは、元弘二年三月としてある。

一南部殿可向飯守城之由蒙レ勅雖二上表候一及度々候間難レ叶シテ去極月廿七日被下候中野殿共十騎マテ候ヘハ無勢無二申計一候及ハヌ其身ニ候ヘトモイタワシトコソ存候ケレ○小田殿西谷殿○御事ハ中々申ニオヨハス候便宜候ハヽ現當共乍レ恐憑ム由申入テト丁寧ニ○大晦日早旦自二城中一懸出シ候テ數尅合戰互罄二忠功一候ケル中今度ノ打手ノ中ニハ宗々ノ者少々常陸前司豪疵候其他軍兵等或被打或負創候ケル後朝敵等成レ悅又城ノ内エ引籠候時自二件城一上洛人語申候愚身者南部殿御事コソ承度候テ雖二尋申一サル御名字ハ未二承及一シト申候凡此城以ノ外强ク候間洛中ノ煩只此一事ニ候其外者諸國静謐了女姓ノ御方樣ニハ都テ無事ノ體可レ有二御被露一候大方者無勢ト申、城之體ト申、此方御スヽトサト申、イツヨリモ都テ意本ナクイマ一シモ御祈禱丁寧ニト存候テ如此申入候、定テ可レ有二御意得一候歟小田殿西谷殿狀シタヽメテ屬二便宜一可進御物語候シカハ定テ可レ然候ハン歟

一出羽入道山城入道去廿八日於二六條河原一被レ切誠以不慮外ニ候心事期後信恐惶謹言

正月八日　　僧日静　在判

此尺牘も、帝大の史料編纂課に有力の史料として寫取してある。又時代史にも金綱集裏書として引用して居る。そうして小田殿の處に時知とし、常陸前司の處に小田時知とし、山城入道の處に兼藤としてある。それから正月八日の處に建武二年と記してあるのは、眞に好き注意といふべきである。

此署名の日静は、當時同名の人二三あるが、是れは蓋し夫の本國寺の第四世三位日静上人ではあるまいか。上人は足利尊氏の叔父である。尊氏は禪を信じ上人は法華宗である。尊氏は逆賊にして上人は特に勤王家であつたゞらうと思はる。夫の護良親王遺胎の御子楞嚴親王日叡上人（鎌倉松葉ヶ谷妙法寺第二世）を收めて弟子とせられたのも偶然ではない

ので、是れには何等か深き關係の存せるものがあるのだらう。果して三位日靜上人とせは妙の又妙なることである。他日別に研究して見よう。

一世上ノ亂ノ後人々六七代ノ先祖ノ本領トモヲ望申候ヨシ承候間身ハ祖父ニシテ候シモノノ時理不盡ニメサレテ候間子細ヲ申候ツキニテ候身老體ニ候上病者ニテ候ヨシ申候テ子息ニテ候孫七千葉太郎殿ニカタヲ入候間トモニ上テ候ニ申付候テ足利殿ヘ申狀ヲアケサスヘキニテ候奉行人ノ方ヘ上候事ハヤスク候ヘトモミチユク事ハ大事ニ候間ヨキビンヲモテ申入候ヨシ承候恐入テ候ヘトモ宮原殿御方ヘ御狀ヲ一〇下候テマイラセタク存候ヨソノ人々ノ訴訟ヲ承候ニハ是ハ近候上理不盡ニメサレテ候所ニテ候又イクサノ忠モ候ヘハ上國連候ハヽサリトモト存候此事且佛法ノタメ存候上一期浮沈ト存候間恐ヲカヘリミス申上御書ヲ一マ〇アツソメ事生前ノ面目ニ奉存候此タメニ佐土ヲモヤトイ進候狀申盡カタク候間アラアラサド房ニ申テ候申上候ヘトモ以ニ此旨一可レ有ニ御披露一候恐惶謹言

八月十二日　　源　定　秀上　在判

此尺牘の署名者源定秀とは誰人なるや不明、又祖父、宮原殿、サド房等も誰人なるや不明なり。何とかして之を取調べ、史實を明了にして見たいと思ふのである。

此外に猶ほ五六通あれども、尤も重要の史料にして勤王事蹟の特に顯著なるものを掲けれは以上の篇々である。……署名者の中に僧日樹とあるは、眞間山第三世にして夫の關東三傑の一人なる日樹上人ならん。釋日澄とあるは、九老僧本要阿闍梨大乘坊日澄上人なるか。上人は池上大坊及び熱田本遠寺等の開祖である……。上封を見ると、多くは出雲公、とし出雲殿としてあるが、此出雲とは誰人なるや不明なれとも、或は夫の身延山五世波木井日臺上人ではあるまいか。上人は實長の曾孫に當る人、少にして叡山に遊學し、そうして夫の勤王軍に參加したこともある。同志の戰死者のため一宇を建立して其菩提に資したといふこともあるが、此出雲公といふのは或は上人ならんかと思はる。更に研究して見ようと思ふのである。……署名の人々及び篇中の人物又は地理的關係に於て不明の點々が多いのは遺憾である。是等は今後十分研究して見たらば、大に發見する所があるだらう。しかし仲々興味もあることだらうと思ふのである……。併し是れだけにしても、聖祖の法子法孫と南部氏一門の人々、卽聖祖門下の緇素が、應長以後元弘建武の時代に際して、如何に忠節を勤王に效したといふ事蹟の梗概は、領會することが出來るであらう……。

而して此聖祖門下の御人々の勤王行爲は何を淵源として發現したかといへば、申までもない、聖祖の薫陶に由來したのである。我聖祖の曠古絶類の勤王家であることは、御遺文及御事蹟に徵して、吾人の常に瞻仰する所である。開目鈔に云く「孝子、慈父ノ王敵トナルヲ見レハ父ヲ捨テヽ王ニ參ルハ孝ノ至リナリ」。眞に是れは忠孝の根本義を明確に道破されたるものにして、夫の念佛信仰燈籠大臣の「欲レ忠則不レ孝欲レ孝則不レ忠」といふ忠孝衝突の忠孝論とは天淵のものである。聖祖門下の緇素の勤王は此聖祖の忠孝論に薫陶されたのである。卽聖祖の勤王を淵源として發現し來りたる聖祖門下の勤王事蹟であると結論せざるを得ないのである。（以上「天鼓」の文、終）

身延の塔頭に圓臺坊といふのがある。此圓臺坊の臺は日臺上人の臺を取つたので、日臺上人は身延山の貫主で波木井六郎さんのお孫さんである。此人が年十七で勤王軍に加はつた。叡山に入學して勉强をなすつて居られる時、身延の甲斐源氏の一族が勤王軍として出掛けると云ふことを聞いて、叡山の學窓を飛出して南朝軍に加はつた。其時分に敗れて他の者は殺されたが、一人坊さんなる故に助かつた。それから此方へ歸つて來て身延の貫主になつた。當時同志の戰死者の追善供養の爲に建てたのが圓臺坊である。

斯う云ふ樣な勤王思想を以て、其勤王を實行して居ると云ふことは何が原因であるかと云ふと、最初日蓮上人の勤王論に依つて親しく薫陶され、或は之に憧憬してこれに依つて、勤王の實が、弟子に依り孫弟子に依り、檀邦に依り、其子孫に依つて現れたのである。夫から又近くは明治戊辰の際、有名な兩月照、清水寺淨智院の月照と周防の月照と、二人ながら勤王家であるが、一方の月照は西鄕と海に這入つて死んで仕舞つた。兩人相約して海に投じたけれ共、西鄕ばかりは助かつて、後に西鄕が「首を回らせば十四年」と、云つて月照を弔つた詩がある。兩月照とも勤王家であるが、此の兩月照以上の勤王家が我が宗にもありました。けれ共、誰も知らないのは、眞に遺憾である。夫等の勤王と云ふことは、全く宗祖の勤王論に私淑して來たのであると思ふ。卽ち、例の松前法華寺の三上潮純師である。是れは『太政官日誌』にもあるし、『明治國史略』にもちやんと出て居ります。彼れは英雄で、學問もあり、頗る辯才もあつて、又議論家である。そして大の勤王家である。唯北鄙松前であつたものだから、一向現はれないで仕舞つた。しかし、知る人は識つて居る、非常な勤王家である。近頃見た書物に、明治二年頃に出來三年頃に出版したもので、而も其の著述者は、五稜廓落城の仕舞まで一方の將をして居つた小杉政之進と云ふ人で捕

房になつて江戸に送られる時分に、津輕の眞言宗の寺で書いた『雨窓記聞』と云ふ明治二年に書いたものが二卷ある。賊軍が書いた書物であるが面白い。敵の三上潮純師のことを書いてある。潮純師の反對者が書いた物であるけれ共、英雄である、豪傑である、勇氣もあり忠義な者であつたと、褒めて書いてあるから面白い。私は其の書物を先頃手に入れて讀んで見た。餘程面白い。五稜廓に居つた榎本さんの部下の一勇將、文章も出來て夫れを書いた日記、その中に、三上師のことを書いてある。

此時敵中一個の坊主あり、三上潮純と名乘る。彈丸の下をも恐れず、左の手に俎板を持ち、玉を防ぎ、右の手に刀を閃かし、兵一兩人を斬倒し、伊奈清一郎（○○役）と戰ひ、伊奈小銃を持つて防ぎ兼ねしを、横田友三郎刀を協はせ、潮純を獲んとして走せ行きしが、潮純早くも清一郎を斬倒し、横田を眼がけ走せ來る。友三郎短銃を以て打ちしも如何にしたりけん發せず、是れに依つて刀を拔く暇なく、柄に手をかけ退きしが、降積りたる雪に蹴つまづき、倒るゝ處を潮純得たりとのしかゝり斬りつくる。此の時堀格之助（軍監）黑澤正助（下役）遙かに之を見て、飛ぶ如く走せつけ、潮純を斬倒し横田を救ふ。玆に於て敵みな屍を越えて遁走す。

斯んな強い和尙さんである。他の書物に依つて見ると、松前の勤王論の一定したのは、潮純の議論からであると云ふ。身延の日鑑上人が明治十二三年の頃、北海道を巡回なされた時分には、潮純の同僚とも云ふべき、同時に戰鬪に從事して居つた老人が生きて居つた。さうして潮純師の逸話を聞いた中に、斯う云ふ事がある。

松前藩が勤王であるか佐幕であるか、毎日會議を開くが藩論がどうも決定しない。潮純師は坊さんながら、君公の顧問と云ふやうな役を云付かつて居る。頭髮を五分刈にして袴を穿（は）いて、四仕舞（よつじまい）と云ふを着て、半刀を一本佩（ぶ）して、毎日出仕して居る。最後に藩論を愈決定しなければならん日に、潮純師が會議に出かけて行つた。多くの侍がズーッと居並んで居る。佐幕黨もあれば勤王黨もある。さうして火花を散らして議論をして居る。潮純師は遙かの末座に坐つて居つた。議論酣に及んで、愈佐幕の議論が盛んになつて、大いに佐幕に議論が傾いたと思ふ時分、是は一大事であると云ふ事に氣が附いて、潮純師が末座からズーッと上の方に進んで、一番上席に居て佐幕論を唱へる有力な役人を、いきなり首を落してしまつた。今日に至つて佐幕論を唱へる者は、皆な斯の如くであるぞよと云つて首を斬つた。さうして、血刀を取つて睨んだら、それに恐入つてしま

つて、一藩は異議なく勤王と決したのである。そこで勤王と決して、賊軍の榎本の方に我藩は勤王である。賊は追拂ふぞと云ふ通知をやつたら、榎本大鳥の方から打出して來たと云ふ事である。それから松前藩は小藩であるから、迚も敵はない、戰爭に負けてしまつて、最後の働きが前に述べた「此の時城中一個の坊主あり」の文章が出來た時である。もう愈いかんと云ふ日になつて、君公をば潮純師の計ひに依つて、新城と云ふ所に逃がしてやつて、もう不可んと云ふ時に、俎を持つて「松前に智勇其の人有りと云はれたる三上潮純とは我が事なり」と大音を上げて、大いに働いて討死したのである。松前藩が勤王論を一決した場合に、五稜廓に居る榎本が、「松前の軍議彼の一禿顱の手に成る以上もう仕方がない」と慨歎をしたと云ふ。松前の軍議はあの坊主で極まつたが、仕方がない、やつつけろと云つたとの事である。

中々偉い坊さんで、辯論家で、戊辰の戰爭前に江戸に出て來た。三上潮純師は史記、漢書、戰國策、左傳といふやうな、書物を讀む事が好きで、特によく讀んだのが史記だつたさうだ。私の先師日薩聖人が、駒込鷄聲ヶ窪に居る時分に、潮純が尋ねて行つて、こんな邊鄙な所に居て、坊さんを相手にして居ては不可ないから、世間學校を拵へたらどうだと云つた。日薩聖人は「俺は少し考があるから、佛學をやらせやうと思ふ」と云たら、「さうかそれぢや仕樣がない」と云つて、それから備後の水呑妙顯寺に行つて、三村大僧正の塾を開いて居る所に行つて、「大きな學校を拵へてやらぬか」と云ふ建策をした。所が三村大僧正も「掩のやうな者が何にするか」と云つて、謙遜して斷つたので、備後の阪谷朗廬の塾（坂谷男の實父）を利用してやらうと云ふので、此の塾に入塾した。さうすると、どうも是は先生を手の中に入れてしまはなければならん、塾に這入つて一番ケッに居つても駄目だ。せめて塾長とか何とか云ふ位置にならなければ面白くない、どうしたら宜からうと云ふので、或る時塾生が大變に居たさうだ、そこへ潮純が「諸君日蓮宗の說法を聞いた事があるか」「イヤ聞かない」「そりや面白いぞ、軍談を聞くより面白い、講談師を聞くより面白いぞ」「そりや聞きたいものだ」「聞かしてやらう、それでは諸君の机を積んで高座を作つて貰はにやならん」高座を拵へて、書生の蒲團を持つて來て、自分が高座に登つて、多くの塾生を集めて、宗祖の御一代記を例の雄辯で、滔々と軍談的にやつて聞かした。滿室の書生は喜んで聞いて居る。餘りそれが面白いから、先生が奥から出て來て見ると、大坊主が妙な事をやつて居る。「怪しからん」と思つて聞いて居ると、如何にも話が上手。先生も障

子を開けて側の方で聞いて居る。「是は豪い雄辯な奴ぢや、此の和尚曲者だ、凡骨で無い、是は爲すあるに足る和尚だ」と先生が別室に呼んで、「お前どう云ふ者だ、全體何が志願で俺の塾へ入塾したか」と云ふ事を聞いた。そこで潮純が、國家の經綸策を堂々と論じた。「成程お前の議論は立派だが、空論で行はれぬ」と云たので、「腐儒語るに足らず」と云つて、此處を去つて北海道に行つて、松前藩の佐幕論を勤王論にしたのである。さう云ふやうな勤王家が、日蓮宗にも有る。潮純師は小泉日慈師などに、四書五經の素讀等を教へたんだ、大入道で「音吐鐘の如し」と云はれて居る。脇田堯惇以上であつたものと見える。腕力もあり武力もあり、學問もあり、議論もあり、北海道で頻りにやる積りであつたのだが、遂に討死してしまつた。併ながらあゝ云ふ邊陬の地に居ても、一藩の方向を誤らしめずして、成敗はとも角も、縱令松前藩が敗れても、大義名分を正しくし、勤王の行動を以て一藩の方向を正しく決した事は、三上潮純師の勤王論がよく行はれた所である。此の思想、勤王の行爲は何處から出たのであるかと云ふと、學問のあつた三上潮純でありますから、日蓮上人の正しき勤王論、之に私淑した結果である。潮純一和尚の勤王論は、日蓮上人の勤王の思想が一緒に現はれたのである。遠くは弟子檀那が、元弘建武の役に從事せられ、南部次郎の如きは、眞先に首刎ねられた事が報告書にある。波木井公の御子さん達が京都まで行つて、勤王に從事して遂に賊に捕まつて、南部次郎殿眞最初に首刎ねられ、不惜身命、色讀的勤王をやつて居られると云ふのは、宗祖の正しき勤王論が、淵源になつて現はれたのである。斯の如き愛國、斯の如き勤王は、皆悉く宗祖の議論である。而して此宗祖の議論は、何處から出たかと云ふと、壽量品の教理教體が淵源で、其の說明として宗祖の勤王論、勤王の行爲が出て居る。而して遂に忠孝の根本義まで論じて、「世に二佛無く國に二王無きは諸經の通範なり」と云ふ定義を立てゝ來て居るのである。誠に正しき所の忠孝の論理である。又從つて正しき勤王の論であると思ふ。是は遁世的宗教に屬する宗教では、此の觀念は起りません。此の要素を持つて居りません。卽ち解脫的宗教の法華の正報依報を說明した其の教理教體が、取りもなほさず日本國の存在を實認し奉り、日本の皇室の存在を實認し奉つたのである。國に就ては愛國の行爲を爲し、皇室に對して勤王の行爲を爲す事が出來たのである。凡そ人の行爲は、その平生の信念から發するものでありますから、宗教を信ずるにも、正しいもの、その國家に適したもの、愛國とか勤王とかの要素を含んで居る宗教を信仰する樣にせねばなりませぬ。

清水龍山校訂

古溪曰。三上潮純上人のことを、かつて野口之布先生未亡人に聞くに。上人、充洽園にあつて薩鑑修昇と共に、學問出頭の人なり。善く努力勉學せり、多分水戸より隨侍の一人ならむ。弓道劍道に達し、膂力も勝れたりと思はる。此の人の忠義の眞心は、優陀那和上の教導によるべしとなり。三上上人の鷄聲ケ窪に薩師を訪ね、水呑に修尊を訪ねたる、本より因緣ありといふべし。修尊の學林經營は、その遺意を存るすものか。又、朗廬塾を去りたるは、人物取るに足らず腐儒用に足らずとして、激語面罵して立ち去りたりとなり。又、加賀藩の勤王失敗に激憤したるにも由るかとなり。

# 弔祭文八篇

## 併尺牘

# 弔日焉師文

狀を案するに、師名は日焉、字は晴澄、行心院は其號、大炊氏、江都相生街の人。父を吉五郎と云ふ、師は其の第三子たり。文久元年師甫めて六歳、相州愛名村の妙唱寺に投じ日會に從ひ、妙典の句逗を受く。日會の鎌倉本覺寺に瑞世するや、師亦從ひ、此に薙染す時に年八歳なり。十歳小西檀林に遊び、說法式を擧く。長するに及び池上妙教庵に遊び、日薩和尙に從て宗學を禀く。明治八年教導職試補に叙せられ、大僧都に累遷す。十一年大教院に遊び、又日薩和尙に從て台當兩部を學び、孜々研鑽、業大に進み、頗る儕輩の推す所となり、和上も亦之を器許す。十二年豫科卒業試驗に登第し紫袈裟を賞與せらる。十五年下谷谷中善性寺に瑞世す。十六年池上中教院助教師に任せられ、尋て大教院助教師に轉し、寮長を兼ぬ。皆丕績あり。廿一年有志者胥謨り、爲宗會なるものを起し、教學の革新を謀るや、彼此の意見枘鑿相容れざるものありて、大に宗門の紛亂を惹起し、綿延數年に及へり。有志者の罪を得る、師も亦連坐學位を鐫退せられ、未だ幾くならずして復することを得たり。師寺に住すること二十年。拮据經營大に其觀を改む。檀信歸嚮の深さ以て知

るべきなり。晩に東身延四十八世の歴次に准せらる。東身延は師薙髪の道場なればなり。卅四年偶、病に臥す、綿綴彌留十二月七日、溘焉として逝く。其生安政三年七月十五日を距る壽四十七。關妙山先塋の次に葬る。師の逝くや、當時故ありて其葬儀を略す。烏兎匆匆七裘葛を閲して、墓木將に拱ならんとす。玆に忌辰を卜し其式を擧ぐ。蓋し其人既に故にして、其情則新なり。悲夫。

師人と爲り氣宇濶達、學を好む。日薩和上曾て其才を愛し、師をして其器を成さしめんと欲し、數、師に勸むるに他門遊學の事を以てす。諸緣に纏絆せらるるの故を以て、其志を果すを得ず。師常に以て遺恨とせり。所謂堂に上りて未た室に入らざるものか。嗚呼師をして其志の如くならしめば、和上の明に負かず、以て宗門の一大法器となり、其爲す所亦豈に此に止らんや。今や則ち亡し。惜むべきかな。明治四十年十二月七日。

## 弔文雅師文

恭く一乘圓頓の法筵を張り、香燈華菓の奠を以て法弟文雅の靈を祭る。曰く、嗚呼文雅既に溘逝し、烏兎匆匆將に四閲月ならんとす。爰に龍水山海長寺の檀信と胥謨り、掩土の式を擧く。寺は是れ其の傳燈の地なればなり。堯惇來りて、其の典を掌るも、亦、偶然にあらざるなり。



憶ふに今を距ること三十三年前、髫齔の童子河原多造、其の母某氏に從て先師日薩和上を雙榎の容月廬に訪ひ、始て師資の緣を訂せるものは、卽ち文雅なり。文雅年甫めて十三當時中に介して命を將ふものは堯惇なり。堯惇時に年十九。堯惇は文雅に於て法門兄弟の誼あり。文雅の堯惇に少きこと六歲。堯惇は以て文雅の兄たるに足らざるものありといへども、文雅は善く堯惇に弟たるの友于を盡したり。蓋し文雅の才、文雅の學、文雅の德、文雅の文章、文雅の議論、文雅の事業の、以て堯惇を起すに足るもの少からざるのみならず、其延て宗門に貢献する所のもの亦多からずとせず。堯惇常に謂へらく我門、人あり將來望むべく前程期すべしと。文雅の文雅たる、一宗の月旦既に定まれり。

然れども宗門濟濟たる多士、其才、其學、其德の豈に文雅に優るものなからんや、其の文章、其議論、其事業の豈文雅に軼くるものなからんや、堯惇の特に文雅に取る所のものは、其の信念の堅實なるにあり。夫れ一信起れは百解隨つて生す。文雅夙に宗祖の人法を鑽仰し、之を信仰すること尤も篤く且堅し。苟くも自家の信念感孚之を發揮するに、直前

勇往刀杖水火を避けず、死生順逆利害得喪、毫も意に介せざるなり。唯胸中本領の存する所に安んじ、本化色讀の芳躅を萬一に體現せんことを期するのみ。蓋し文雅の才、文雅の學、文雅の德、文雅の文章。文雅の議論、文雅の事業、之を内にしては家庭の教育、子女の嬉嬉として嫺睦し、之を外にしては檀信の化導四衆の喁喁として瞻仰するもの、其一道の貫線を尋ね來るに、彼の堅實の信念底より繰り出さざるはなし。嗚呼文雅は信念堅實の人なり、懿なるかな。

曩に法兄文靜上人の示寂するや、堯惇に屬するに龍水山の傳燈其の人を擧くることを以てせらる。堯惇は文雅を推す。文雅善く上人の衣鉢を傳へ、獅床拂を執るもの數年。大に寺門を經營する所あり、檀信望みを屬す。更に大に爲す所あらんとして逝きたり。今や則ち亡し。悲夫。文雅年四十六、春秋未だ高からず、法蓮猶ほ壯んなり。是をして在らしめは、其の施爲する所豈に此に止らんや。然りといへとも嗣子文雄、性行克く乃父に肖る。加藤氏子あり。傳燈は則ち法弟文覩にして亦質直の士、龍水山其の人あり。皆善く文雅の心を心として其の跡を紹繼する所あらん。文雅其れ慮を安せよ。嗚呼、我が中王院文雅日淵上人。尙饗。

## 弔日恕上人文

狀を案ずるに、上人名は日恕、字は潮郁、深厚院と稱す。雲庵は其號なり。越後三嶋郡關原村の人、父を武見孫八といふ。上人其第三子たり。年甫て十一、郡の治曆寺に投じ、日洽に從ふ。其家本權門に屬す、故に父母其の治曆にあるを喜ばず。數、其歸家を促したれども肯はず、父母も、亦之を奈んともする能はず。年十四、薙髮し、飯高檀林に遊び、尋て内山妙廣寺に遊び日鑑和上に師事す。寺は和上多年下帷の處なり。和上の祖山に瑞世せらるるや、上人亦從て其中教院に入る。又島田篁村の塾に遊び漢籍を學ぶこと三年、再び祖山に登り和上に從學し、明治十年卒業して中教院助教授となる。訓導に補せられ、權大僧正に累遷す。春米寶林寺に主として、兼て身延清兮寺を董す。寺は和上の晩年隱栖をトせる所の處にして、其自厚山清兮寺と稱するは、和上の自ら命名する所たり。工未だ成らず、和上示寂せらる。上人善く和上の意を承け、其後圖を成せり。上人の武の堀内妙法寺に瑞世する、亦和上の顧命に依る。寺は圖宗の一大雄刹なり。上人此に主とし、兼て清兮寺を董すること故の如し。拮据經營、輪奐の美、壯閎の觀、山中の巨刹たることを得た

るは、上人の力なり。十萬人搆なるものを創設し、一大財源を造り、以て教育に、慈善に資するもの多からずとせず。茗谷園を開設し、子弟を薫育す。闔宗の父兄頼て以て便とし其子弟を托するもの多し。人材彬彬として輩出す。中教院教授、小檀林林長、會計監督、評議委員等に任ぜられ、數數宗會甲部議員に選ばれ、皆丕績あり。學校に獻資し、道路に寄金し、窮を恤み貧に施すの類、僂指すべからず。賞せらるること數なり、四十四年、寺を教篤に屬し、悠々老を箋輪の里眞養寺に養ふ。晩に其鄕關原に一宇を創建し、武見氏の香花寺とし、長へに以て雙親の菩提に資す。卽ち妙法山眞淨寺是れなり。大正五年、闔衆の推す所となり、本山妙覺寺に瑞世す。未だ幾くならずして病に罹り、綿綴彌留、越に六年七月三日、泊然として化す。其生嘉永六年十月二日を距る壽六十五。日圓山先塋の次に窆し、分骨して淸兮寺に、眞淨寺に、妙覺寺に葬る。悲夫。

弟子六人あり、曰く潮淸、潮寛、玄孝、玄澄、觀英、潮海、皆篤厚の士、現に一寺に主たり。又上人の資助に頼て、而して其器を成せしもの、一にして足らず。曰く教篤、曰く是忠、曰く教達。教篤は卽ち今の妙法寺の寺董なり。是忠は卽ち善性寺主日謙なり。教達は卽ち宗延寺寺主其人なり。亦皆得易からざるの材なり。上人の門下濟濟たる多士、良に盛なる哉。

上人資性沈毅、風丰高雅、人犯す能はず。幼少道に志し、日鑑和上に親炙すること二十有余年、和上も亦之を器許し、提撕多年、和上の衣鉢獨り上人に傳ふるものあるが如く然り。上人善く和上に事ふ、和上の病で祖山にあるや、上人其臥榻に侍し、奉養一日も怠らず、和上の溘逝せらるるや、上人尤も慟哭し、考妣を喪するが如し。唯其れ然り、故に上人常に和上の德を欽し、和上の風を慕ふこと、老いて益切なり。上人一世の事功は、皆範を和上に資らさるものなし。淵源由來する所あり。上人病革かなるや、徐に左右を顧みて云く、請ふ宗祖大士に訣別を奉ぜんと、特に專使を妙法寺と妙覺寺とに价したり。且云く三日中、我哄然大笑せば、卽ち現滅の時なりと。果して其言の如しと云ふ。蓋し其脫灑の風は、日鑑和上に私淑する深きの致す所なり。亦欽すべき哉。堯惇は上人に於て、四十年來の舊誼あり。曾て上人と共に祖山に登り、和上の講帷に侍すること數年、堯惇の上人を知る久し、今や來て其葬筵に莅み、俯仰今昔の感に堪へず。爰に其狀を經緯して略傳とし、且以て歎德に擬すと云ふ。大正六年八月十七日。

## 弔日正上人文

狀を案ずるに、上人名は日正、幼字千代吉、薙染して完淨と稱す、智教院は其號なり。相模高座郡澁谷村福田の人、父は馬場長兵衛、上人は其三男たり。天保十四年四月八日、年甫て八歳、片瀨常立寺日教に從て祝髮す。嘉永五年東耀山彌勒寺に瑞世す。明治七年教導職試補に叙せられ權僧都に累遷す。上人寺を董すること六十六年。寺門を經營し、檀信を薫化すること、其功少からずとす。上人性、潔を尙ふ、曉起燭を秉て堂園を洒掃し、而して後、讃佛誦經に從事するを以て日課とす。故に淨界一點の塵芥を見ず、香客賽人、足彌勒寺の門に至るもの、眞に出塵の思ひあり。是れ六十年來猶ほ一日の如し。上人の操行、高うして常あること此くの如し。洵に懿なる哉。大正六年十一月二十五日、泊然として化す。其生天保三年五月八日を距る、壽八十六。東耀山先塋の次に葬る。悲夫。大正六年十一月二十八日。

## 弔新居邦太郎君文

狀を案するに、君名は邦太郎、新居氏、父を善兵衛と云ふ。君は其長子たり。上毛桐生の人なり。先師文明院日薩和上も亦新居氏の出にして、善兵衛は和上の兄たり。君和上に於て叔姪の親ありとす。明治初年横濱の開港場となるや、善兵衛首として横濱に赴き、直に洋人と互市を爲す。善兵衛は奇傑の資にして市場商機を弄し、數、洋人をして膽を寒からしめ、善兵衛の名聲一世に振へり。君幼少父に隨て此に住す。未だ幾ならず、父病んで沒す、君克く其業を襲ぎ、家聲益揚れり。謂ゆる福島屋の號、隆隆として遐邇に傳播し、蔚然として豪商と稱せり。是より先、君祖母に從て駒籠蓮久寺にあり。寺は和上の學室のある所にして、學徒四集、會下龍象を出せり。和上加陽の充洽園を去り、蓮久寺に住し、育英を事とし、且以て母堂を養ふ。和上の母堂は卽ち君の祖母なり。君此にあつて書を繙き、字を習ふ。君の信仰と學問とは、其の淵源の由來する、全く此處に存せりといふべし。

君蒲柳の質、善く病む。一旦翻然として商機を擲ち、誦經唱題、悠悠以て長へに老を終らんとす。大正十一年六月十三日泊然として逝く。其生嘉永五年七月廿七日を距る、壽七十一、長榮山本門寺に葬る。悲夫。

君同族に娶り、一女を擧く、夭す。故あり室に別れ、後原澤氏に娶り、一男一女を擧く

亦皆天す。小山氏の子を養ひて嗣となすといふ。君人となり質直而仁厚、和上に事へて貞なり。凡そ和上の命、嘗て些の違背せるを見ず。和上の、教育に慈善に感化救濟に、宗門と國家とに貢献せらるるや、君克く之を資助し、和上をして顧慮する所なからしめたり。財を惜まざること糞土の如き概ありたるもの、君に於て之を見る。

嗚呼和上の功澤の絶大にして長へに天地法界に傳ふる所以は、君の功澤の永久に滅せざる所以ならん。君其れ以て瞑すべし。南無妙法蓮華經。大正十一年六月十六日。

## 靈骨奉安式告文

山形市の東、鬱然として崛起するもの、之を日月山とす。白堊丹碧巍甍巨桷の聳然として起り、夫の重疊迤逶、綿亙起伏の山色嵐光と相映帶して、一大淨境の巨觀を其麓に現はしたるもの、是れ東北法華の道場たり。

優婆塞荒川重威居士は、篤信の士、其徒と胥謨り、經始計畫大に土木を起し、日ならずして靈骨堂の成るを告ぐ。爰に敕諡大師號宣下の第一春、建長開宗の佳辰を卜し、靈骨奉安の典を擧く。



靈骨は大師鶴林の靈域、長榮山本門寺より分移するところ、亮惇隨て而して之を奉送せり。大迫大將、佐藤中將等亦隨つて行中にあり。緇素雲集、威儀翼々、法幢風に翻り、鼓笛洋々、歡呼の聲天地を振撼するの概あり。盛なるかな。

大雄世尊曾て弘經の三時を立て、滅後流布の次第を說き給へり。曰く正法千年、曰く像法千年、曰く末法萬年。其末法萬年は、法華流布の時機なること、經文昭昭として明かなり。我祖本化の再身を以て、如來の懸識に應し、東土の大日本國に降生し、末法萬年の始諸宗流布の後に起ち、大聲獅吼して法華を唱導し、布教の大綱を示し給へり。曰く教、曰く機、曰く時、曰く國、曰く序、是れ之を弘教の五綱といふ。蓋し法華流布の奎運は、唯此時を然りとし、以て弘教者をして遵據する所あらしめたり。嗚呼末法萬年の時間と空間とは法華流布の獨擅場たることは、斷乎動かすべからざるなり。惟ふに我祖は、法華經に據り、一大宗教を建設し、是に由て宇内古今の教法を統一せんことを以て、其抱負とし其經綸とせられたり。故に曰く、日蓮が慈悲廣大ならば、南無妙法蓮華經は萬年の外末來までも流布すべし。又曰く、佛法は必ず東土の日本より起る。又曰く、日本乃至一閻浮提一同に、本門の教主釋尊を本尊とすべし。我祖立正開教の規模たる、洵に宏遠なりと謂ひつ

べし。今や開宗を距ること將に七百年に近からんとす。星霜を經ること多からずとせざるなり。然り而して、布教の跡彼れの如し、後昆たるもの乃祖經營の艱難に對し、豈に忸怩たらざるを得んや。

然れども、化境の空間は大にして、流布の時間は長し。我等後昆たるもの、誠に克く其遺訓に遵ひ、其規模に副ふものあらば、宗風を扇揚して祖恩に報答することを得ん。嗚呼東北佛教の曙光は、其れ此の日月山の巓より起らん。我祖常在の靈、尚はくは、加被力を垂れ給はんことを。大正拾貳年四月廿八日。

## 元使六百五十年祭祭文

維れ大正十四年九月七日、恭しく一乘圓頓の法筵を張り、香燈華菓の奠を以て、元使杜世忠等五士の靈を祭る。曰く、史に稱す、建治元年秋、北條時宗元使杜世忠等を相の龍口に斬ると。悠々たる乾坤、春風秋雨數百歳を閲し、殆ど不祀の鬼とならんとして顧みられず。惟ふに、當時元世祖忽必烈、蒙古の原野に崛起し、赤手一旦宋を覆し、金を亡ぼし、四百餘州を統一し、勢に乘じ我神州に向て呑噬を逞くせんとす。彼れ陰に禍心を包藏し、陽に使臣を遣して、交通を促すこと數數なりしが、北條氏、使臣を逐ひ報ゆる所なし。彼れ又邊海に寇し、殺傷を擅にせり。至元十二年我建治元年、特に禮部侍郎杜世忠、兵部侍郎何文著に書を賚らして我に使せしむ。我又報ぜず。且罪を數めて之を龍口に斬る。忽必烈大に怒る。至元十八年、我弘安四年阿剌罕、范文虎、忻都、洪茶丘等鐵騎十萬步兵三十萬軍船四千艘、高麗軍二萬五千兵船九百に將として、我神州を侵さしむ。是を弘安四年の大役なりとす。彼れ元主が禍心を包藏し、交通を促し、嚇するに兵馬の威を以てし、其呑噬の欲を逞しうせんとして侮辱に侮辱を加へ、殺傷に殺傷を極めたるが如きは、我神州人の共に憤慨する所なりとはいへ、其使臣等を斬に處するに至りては、暴も亦極まれり。是れ曲我にあり、頓に彼れをして口を征戰に藉るを得せしめたり。夫れ使臣等は、利害處を異にし、順逆地を同うせず、亦各其主のために忠を盡したるのみ。夫の書辭の無禮の如き使臣等の責にあらざるなり。語に云く、使於四方不辱君命可謂士矣。是れ使臣等の謂ひなり。且夫れ、國難の來る、其起因、擧國信仰を誤り自ら謗法の罪に坐するにあるに、毫も反省する所なく、直に使臣等の首を斬る。時宗の勇は則ち勇、快は則ち快なるが如しといへども、暴虎馮河、君子の取らざる所なり。況や其暴擧の勢は、神州無前の國難を速き、

人心汹々、上下枕を安せず、遂に至尊をして「朕以躬代國難」との綸言をなし給ふに至らしむ。史を讀みて此に至る、凛然として粟の膚に生ずるを覺え、覺えず卷を掩うて歎ずるもの之を久うす。北條氏の暴擧の如き國家を孤注するものといふべし。啻に元使に暴虐を加へたるのみにあらざるなり。

日蓮聖人云く、「科ナキ蒙古ノ使ノ頸刎ラレ候ケル事不便ニ候へ。」不便の一語は、聖人が元使に同情せられたる大慈悲の一聲々にして、謂ゆる聲、佛事を爲すもの、使臣等の離苦得樂、其れ唯た此に存せり。聖人又云く、「日蓮ガ慈悲廣大ナラバ、南無妙法蓮華經ハ、萬年ノ外未來マテモ流布スヘシ。」使臣等の開悟得脱、亦其れ此に在らん。

相の片瀬常立寺は元使埋骨の地にして墳墓存せり。玆に六百五十年に丁れるを以て、記念法要を修し、以て使臣等の靈を弔慰し、併せて文永弘安二役彼我兩國殉難者の靈を追弔せんと欲すること切なり。

相模の海、潮聲澎湃たり。鎌倉の山、烟雲漠々たり。元使の古墳、其間に巋然孑立。六百年來長へに本佛の慈聲に接することを得たり。成佛に於て何かあらん。尚饗。

## 本門寺眞骨堂上梁文

武藏野の南端、多摩川の頭、遙に身延山の艮位に當りて、其隆然として聳え、高甍巨栱白堊丹塗の、杉松蓊鬱雲煙縹渺の間に起伏するもの、之を長榮山本門寺とす。是れ本化大士鶴林の靈蹤たり。寺は本、池上宗仲公の邸なり、公夙に本化の人法に感孚し、遂に一山を擧けて之を奉すと云ふ。弘安五年大士池上の地を相して、現滅の化儀を示し給ふ。故に臨終柱といひ、臨滅度時之鐘といひ、茶毘所といひ、御灰塔といひ、御眞骨堂といふもの、悠悠六百有餘年、長へに本時の風光と相映帶し、宛然として傳はれり。惟ふに夫の火滅以後拾取舍利、以て身延の澤に奉埋したりとはいへ、鶴林の山、荼毘の谿、豈に碎身數片の靈骨、存して傳はらざらんや。池上に靈骨の現在せるは、本有自爾當然と云ふべきものにして、後世の分骨と稱し、分影と稱するものの比にあらざること明かにして、其淵源の由來する所、眞に深遠なりといふべし。

然るに古來之を奉安ずべき殿堂を造營せず、珍重什襲して、之を寶庫に藏したるのみ。貫主日昇上人、常に之を慨し、地を山上に闢き、一堂を起し、靈骨を奉安し、自ら以て御

眞骨堂と稱せり。上人嘗て延山貫主上人に語つて云く、我山も亦本化の靈骨を藏せること久し。之を一堂に奉安し、宗祖御眞骨堂と稱せんとす、可なる乎。日鑑上人云く、靈骨の池上に存せる、蓋し當然ならん。之を奉安するの殿堂、之を稱して御眞骨堂と云ふ、其れ誰か不然とせん。師以て意となすことなかれと。上人快然として椽筆を揮ひ、「宗祖御眞骨堂」の額字を書せられたり。便ち知る、新に堂を造り別に之を奉安し、顯然として御眞骨と創唱したるものは、日昇上人なりとす。堂は明治三十五年祝融の災に罹り、烏有に歸したり。大正十年再建を謀り、未だ幾ならず大震災に逢ひて一頓せしが、董者其人を得て、克く庶工を督し、拮据營理、業大に進み、唯に舊觀に倍徙するのみならざるなり。玆に本日を卜し、上梁の典を擧ぐ。嗚呼莊なる哉。欣抃措く能はす慶賛辭なし。山主日筵上人に代り、來りて其式を督し、恭しく上梁の祝意を致すといふ。大正十五年四月二十七日。

編者曰。三籟上人の弔祭告文等尙甚だ多し。又『日蓮宗慶弔文例』等、記載亦多し。今只什が一を錄するのみ。

## 鋤田孝山師宛尺牘

時下燈火可親之候愈御清福爲人法大慶此事に存候

過般應請之節は特に優待を蒙り候段深感銘罷在候立像寺へ投宿して日夕學祖老和上の墓に登拜することを得たるは堯惇四十年來の素懷を達する眞に千古之好因緣難有々々存入申候

鬱然たる老樹を望み蒼苔滿地の庭園に對し轉た充洽園の當時を偲び堯惇も其法孫たるの一人かと深く其光榮を喜び且自ら其不肖を愧入申候

尊師には御老體なるにも拘らす日々深更まで御接待を蒙り友情不淺候

野生の同窓海解勇猛諸兄皆既に物故したるの今日雙榎の同窓としては唯一人の尊師あるのみ其尊師と久振にてしかも遠國しかも學祖墳墓の地しかも其充洽園にて相對坐して娓々として嬉々として談笑したるは野生終身の快事なにとも形容すべき語なし

奉別の際母堂の遺品惠與難有存候終身大切に使用可申候且母堂へ御回

向可申上候且名物の點心一盒惠投被下日夕賞味罷在候多々謝々
今の立像寺は賢弟なる故か野生に對しいとも仔細に斡旋の勞を取らるゝのみならず用意周到感じ入申候
堂園の内外等洒掃よく行屆き「滿目無一塵」特に敬服いたし候而して是れ尊師の訓育せられたる所ならん「所作佛事」是ればかりにても立像寺々主の資格は有之候將來此風を紹繼する樣にいたしたし
去九日歸山以來自山例年の會式又は遠近へ應請出講等客月中は寸暇も無之御禮狀遲々に及びたり多々罪々請恕
先は乍御禮得貴意度如此候　草々頓首

十一月一日　　星下　堯惇　拜

孝山尊師
梧下

追而立像寺へは別に書面不差出申候尊師より可然御傳聲被下度候

## 堯惇院日毅上人歎德文

酒井日愼

勸請(略)。爰ニ長興長榮兩山第七十三世堯惇院日毅上人本葬ノ式典ヲ擧グ。
狀ヲ按ズルニ、師諱ハ日毅、字ハ堯惇、三籟ト號ス。幼名ハ政之。菊地宜光ノ次男ナリ出デテ尼ケ崎藩士脇田氏ヲ襲グ。萬延元年十一月二十八日江戸深川ノ藩邸ニ誕ス。幼ヨリ藩儒服部元雄ニ就イテ學ヲ受ク。維新ノ際父ニ從ヒテ城西布田ニ移ル。遂ニ邑ノ蓮慶寺桑原日預ニ從ヒテ出家セントス。日預之ヲ芝金地院内大教院ニ容月和上ノ門ニ入ラシム。志氣爽邁、才藻俊發。和上器許シ、意ヲ加ヘテ撫育ス。甫メテ十六剃度ス。實ニ明治九年三月十七日ニシテ、維新後本宗最初ノ得度式ナリ。清水梁山師年十二、亦共ニ得度ス。和上命ジテ贊ヲ信夫恕軒先生ニ執ラシム。强記博洽才藻羣ヲ拔キ、文名夙ニ嘖嘖タリ。業ヲ卒ヘテ雙榎ニ歸リ宗學ニ從フ。明治十七年、年二十四、大教院本科三級ヲ卒業シ、權大講義ニ叙セラル。明治二十一年、二十九歳、本山星下妙純寺ニ瑞世ス。弱冠ニシテ英名内外ニ布キ、一躍本山ニ榮進、師ノ如キハ稀ナリ。是歳薩和上遷化、宗門棟梁ヲ失フ。恰モ宗門

制度更革諮問總會、紛論囂囂タリ。上人强義屈セズ。宛然本山黨ニ對スル一大敵國タリ。
又年齒二十前後ニシテ大教院助教トナリ、第三區大檀支林准教師、第一區大檀支林教師、
大檀林教師、第一學區學務委員、第一學區並ニ第二學區檀林試驗監督等ニ歷任、又日蓮宗
大學林ノ創立ニ當リテハ尤モ獻替スル所アリ、後推サレテ日蓮宗大學林林長トナル。明治
四十四年四月其職ヲ辭スルニ至ルマデ教育事業ニ關係スルコト前後實ニ三十餘年ナリ。尋
デ大正三年十一月、教學審議會議員ニ擧ゲラレ、議長ニ推サル。又、講說布教ニ至リテハ
宗門近世稀有ノ雄辯ニシテ、壇上ノ獅吼、善ク聽者ヲシテ感悅信伏セシム。曾テ、大日本
佛教青年會ノ創立セラルルヤ、聘セラレテ三河蒲郡某寺ノ講ニ趣ク。乃チ大ニ折伏逆化ヲ
施シ、而强毒之、縱論橫說、他門ヲシテ完膚ナカラシム。教海騷然、天下、脇田堯惇ノ名
ヲ知ラザルナシ。二十七八年及三十七八年ノ兩役、挺身從軍、砲煙彈雨ノ間ニ馳驅シ、講
演弔祭以テ士氣ヲ鼓舞シ英靈ヲ慰ム。明治四十年二月、布教院長ニ任ゼラレ盡瘁年アリ。
老來疾ヲ得テ教壇ヲ退キシモ、來リ化ニ趨ク者アレバ、道俗親疎ヲ論ゼズ善言誘諭シテ倦
マズ、時ニ高談雄辯四邊ヲ驚カシ、意氣正ニ壯者ヲ凌グノ槩アリキ。師ノ宗門政治ニ關セ
ルハ明治二十二年四月、臨時宗務院詰ト爲ルニ始マル。三十年三月、宗會法編纂委員ニ任

ゼラレ、三十四年第一宗會ノ開カルルヤ、原案起草委員トシテ宗務役員タリ。三十六年六
月、宗會甲部議員ニ選バレシヨリ、每次議長ニ推サル。蓋シ師容貌魁梧、威儀堂堂、言語
明晰、音吐鐘ノ如ク、人ヲシテ威壓ヲ感ゼシム。加之少年ヨリ芝山內神佛合併大教院、雙
榎大教院等ニ於ケル大會議ヲ目睹シ、議場整理ノ方、議事進行ノ術ヲ得、是ヲ以テ快刀亂
麻善ク其效ヲ擧グ。宗會一院制トナルヤ、每ニ議長ニ任ジ現ニ其職ニアリ。此間、評議員
タリシコト數次。學制ノ改革、教線ノ擴張、法規ノ整齊、一トシテ與ラザルハ無シ。特ニ
開宗六百五十年ニ際シテ門下各派統合問題ノ起ルヤ、各教團ヲ提撕シテ紀念大會ノ慶行ニ
斡旋シ、並ニ各派ノ融歸ニ盡瘁スル等、法勳教功一一盡シ難シ。退イテ星下ニ燕居スルヤ
專ラ先師薩和上ノ遺稿ヲ修治シ、又和上ノ遺志ヲ體シテ優陀那院日輝上人ノ述作ヲ校訂シ
充洽園全集ノ出版ヲ監修シテ其業ヲ大成セシム。大正十五年九月、衆望ヲ荷ヒテ長興長榮
兩山ヲ董シ、疾ヲ力メテ孜孜トシテ山運ノ啓興ニ努メ、宗祖六百五十年遠忌ヲ迎フルニ備
フ。然ルニ在職僅ニ一年有半ニシテ、昭和三年一月二十九日、安祥トシテ化ス。壽六十九
法臘五十三。荼毘シテ本門寺先塋ノ次ニ葬ル。明治九年十二月、教導職試補ニ新叙セラレ
累進シテ大正三年五月、權大僧正ニ陞ル。二十七歲ニシテ已ニ緋金襴袈裟着用ヲ公許セラ

ル。又教育布教ニ關シ、數、宗門ヨリ旌表セラル。上人ノ余ニ於ケル五十年來ノ舊知タリ。文靜日與師去リ、文雅日淵師逝キ、薩和上ノ芳躅ヲ紹グモノ、獨リ上人ヲ期スルノ時、忽上人ノ遷化ニ遇フ。悵恨措ク所ヲ知ラザルナリ。上人ノ門下、皆文ヲ善クス。林古溪ハ和漢ノ學ニ長シ、學徒ニ講授シ、兼テ詩國風ニ長ズ。最上堯雅ハ新聞ヲ創刊シテ湘南ニ筆陣ヲ張リ、肉弟菊地松堂ハ憲政公論ヲ主宰シテ中央文壇ニ雄飛ス。上人ノ學德、筆舌ノ盡スベキ所ニ非ズ、今只九牛ノ一毫ヲ叙シテ歎德ニ擬ス。上人希ハクハ寂光ノ寶土ニ於イテ愛憐納受シ給ハンコトヲ。南無妙法蓮華經。昭和三年十二月十三日。

日蓮宗管長　長興長榮兩山第七十四世　大僧正　酒井日慎　和南

## 附歎德文後

先師三籟上人。容月和上之遺弟也。同門法兄弟亦多矣。法兄守本文靜師。實法叔也。其松竹遺響行于世。法兄石川惺亮師初名桂巖。文靜師之弟也。自南谷隨移雙榎。董善國之時。年甫十七。後奇裝馬上。折伏說法。所謂石川將軍也。同時得度。則有清水梁山。夙竪新義。創異流。其徒猶盛。弟則濱島智琢。萩原元式。一德行。一學殖。各樹旗幟。佐野堯遠。亦不好詩。中野文靚。好詩有集。已失處。可惜。加藤文雅。篤實謹直。刊書論著甚多。大有功于世矣。其遺藁弟子玉谷日音輯之。將上梓也。野坂桂山。曾爲吏。中島日忍。善長育子弟。松本文恭。留學美國。不知存亡。金子厚山。善書。容月先師寂。有遺命隨靈龜上人。猶健在不變庵。弟子則最上堯雅。今在横須賀。發刊新志。男孝二。立正中學校教員。又有男女。女已嫁云。上人在依知。有飛鳥井幾太郎。懇摯純實。遷化之後。猶善顧眷周旋遺族。妙傳寺日霑師。以同學亦深致懇篤云。余已與容江上人編松竹遺響。又與古楳上人輯容月先師和上遺事遺文。今復裒輯三籟遺艸。事如奇。而於余當作之事已。黯然久之。昭和十四年十月三十日。舊弟子林竹次郎記。

附載

容江　中野文覩　一十三首

容江東京人。隨薩和上剃度。卒雙榎學林之業。歷董高崎妙見寺。江差法華寺。鎌倉本行院。松本龍興寺。清水妙慶寺。晉本山海長寺。又任職於大教院說教課員。日蓮宗大學林舍監。靜岡縣宗務所長等皆有丕績。陞叙權大僧正。昭和十年三月廿一日寂。壽七十一。法蘰五十八。嘗受教岡鹿門。

望嶽

蓮峯八朶聳青霄。積雪春秋竟未消。中夜九天仙子舞。有人縹緲坐吹簫。
天鍾靈秀壯神州。維嶽巍然壓五洲。白雪昭昭雲窈窕。專藩寶祚幾千秋。

龍水山偶題

居然東海古禪關。嶽色濤光相映閒。諷誦停時詩境寂。神龍來見共開顏。
龍水山樓枕碧灣。長風吹至自仙關。雲搖忽現中天嶽。雪色潮聲日往還。
高樓宛似坐清穹。此處駿南靈氣鍾。日暮蒼龍來入水。化爲三保萬株松。
誰向滄溟說際邊。芙蓉大觀列欄前。玄談熟處詩情湧。又以色心交大千。

駿海豆山叢此間。芙蓉仙影映清灣。飛潮曉去三千里。晚向雲峯浩蕩還。

昭和九年六月。屈請古楳老師。講觀心本尊鈔。受講六十餘人。三日無倦。

賦此以謝。

六十餘人侍講筵。觀心宗要辯如泉。海潮音與芙蓉色。併作師徒一味禪。

高僧神寂本來天。宛似芳茶颺淡煙。樂說無窮三日過。一時齊歎飽佳緣。

龍水海樓迎老禪。山僧野客侍經筵。本時風色儼乎在。碧落寥寥馨白蓮。

夏終和古楳老師

昔在朗峯嚴法城。老來重聽海潮清。其人若玉美溫潤。此調如琴音郭宏。蓮嶽

悠雲徐有影。松林舊雨靜無聲。回頭三十年前事。又拜瑤吟不耐情。

題觀世音菩薩像

九萬長程印度天。由來東漸好因緣。南都曾在東大寺。北國今存法華巔。古貌

儼然龍鬼護。慈顏圓滿藕絲纏。普陀山上一痕月。照遍十方良福田。

小尊奇古恰天然。六十餘州遍化緣。獅吼時醒煩惱夢。甘霖常潤不毛田。曇華

映發三千歲。龜木追隨幾億年。勿怪先師朗峯晚。慇懃付與淚漣漣。

松堂　菊地茂　一十四首

君三籟上人弟也。學于早稻田大學。操觚爲業。歷遊四方。又嘗爲民政黨理事。監編輯事。昭和三年。爲衆議院議員候補。政戰將酣。三籟上人寂。志終違矣。後復爲候補。未及戰。忽焉長逝。昭和七年十月二十五日。年五十四。

伯州皆生溫泉

白沙汀上湧溫泉。綺館連甍碧海前。幾處絃歌晚來鬧。何人鼓枻月明船。

雲州清水寺

客中風物儘堪看。行誦離騷獨自歡。恰是端陽時節好。雲州古寺采山蘭。

多久聖廟

古廟青山裏。喬松擁石門。彩龕祥鳳舞。彤壁瑞龍奔。學敗西鄰亂。儒崇日域尊。

文宣嚴祀在。千載養眞源。

林子平墓下作

活眼當年說海防。墓盲咄咄喚爲狂。六無歌是眼前驗。三士史方身後芳。墓畔

花飛空碧艸。林間鳥叫欲斜陽。唯今復有風魚警。酹酒招魂感慨長。

題松原村莊

城市塵囂遠。松筠翠掩門。春笙雲雀囀。夏鼓水蛙喧。袁巷臥山雪。庾樓開月罇。
鵜巢安膝可。肯羨鶴乘軒。

贈僧

雲水生涯雲水緣。三衣一鉢幾年年。脫離離脫人天累。因看火中清淨蓮。

海亭銷暑

世累辟來臨碧灣。清風灑淨醉餘顏。忘機了也忘炎了。身與海鷗閒又閒。

秋夜書感

殷憂萬斛夜漫漫。投筆吾將據馬鞍。一天無月秋如墨。把劍燈前幾度看。
回頭塞外莽風塵。聽到蟲聲悲且辛。今夜吾兒夢應冷。干戈萬里遠征身。

加州山代溫泉

樓在奇巖怪石間。溫泉水滑似仙寰。憑欄四顧春猶早。雪白加州山又山。

呈空谷前國相



峩冠擲去對斜暉。一榻春寒寄瘦姿。黃葉紅花看過了。閒愁結作咏懷詩。

麻溪南浦園雅會次韻

鳶飛魚躍見天眞。綠竹紅鵑個個新。好與羣賢醒又醉。風流何讓晉時人。

綠雲莊雅集次主人韻

共是風流儒雅朋。襟懷瀟灑潔於冰。憑窗愛見幽莊夕。螢火如星月似燈。
酒有聖賢詩有朋。任他世味冷于冰。漲池新水溶溶碧。影蘸苦龕一點燈。

# 三籟遺艸後記

余曩在松山高等學校。松堂君寄書曰。三籟集將成。請詩以跋。余復之曰。余已爲不孝徒。懼汚先師之金玉。謹辭。松堂又寄書曰。文雅之道。自有別存焉。疇昔邈矣。不論而可。是篇作跋。措子而誰。終諾。未果。自松山歸爲立正大學講師。松堂音耗渺然。已有容月先師遺稿編輯之事。始聞松堂之急逝在數年之前。嘆息久之。時雙榎亮公言余。傳存之事。措子誰乎。朗峯愼上則曰。是子之責也。余慨然從事。而十三周忌辰已逼。努力黽勉。校合將竣。乃題詩曰。三籟上人雙榎豪。容月廬中名最高。奇文欣賞樓主庇。夙與鵬鯤作敖敖。延山富水多奇景。一一詩壇稱俊穎。朗峯終夜經聲續。



侍牀乃看江山靜。衣緋書殿應請時。非是法兄卽吾師。月隱重山秋風寂。房室侍巾奈惡兒。不淨巾匜恣紙筆。作務雖勤多漏失。心在讀書行儀麤。艸生庭除茸而茁。炎日嚴霜夏踏氷。迅雷風烈恆競競。回首唯今慙媿甚。不知懇誨用膺懲。魔羣伏壓無前近。棣棣威儀能解忿。如阜如岳奇堂堂。如鐘如雷響隱隱。三籟上人論辯雄。颯降涑雨捲長風。當年制御伊人在。今日政壇一空空。三籟上人才氣足。年少星山（本山妙純寺）紹法燭。詩筆依違不似前。千年不惜不留錄。容月雄文本翩翩。松竹淸韻猶尙存。今拜遺艸感無極。目眊心憒不能言。不能言兮不能寫。吁鬱鬱兮知我寡。香煙渺渺憶音容。便以此篇付大雅。（已上）詩成。乃先示之池上通一上人。三籟先師兄弟存者。唯此人已。次報之堯雅。三籟先師最後弟子也。昭和己卯八月第八日。舊弟子林節。記於煙田千樹樓。

久遠寺殿　蒲田行靜殿　關文月殿　長谷川存佑殿　三戸勝亮殿、
本門寺殿　駒谷行妙殿　法蓮寺殿　久保田桂秀殿　鹽出孝潤殿
妙純寺殿　長谷川台明殿　妙經寺殿　玉谷日晉殿　菊池泰殿
望月日謙殿　淺野文良殿　中島豐山殿　本能寺殿　加藤文輝殿
清水龍山殿　山田法政殿　島田勝存殿　建德寺殿　山田日眞殿
酒井日慎殿　大島隆存殿　鈴木文亮殿　妙福寺殿　中野文隆殿
金子厚山殿　前田妙境殿　末崎快存殿　本妙寺殿　小山圓泰殿
金子辨淨殿　藤村文桂殿　濱島文眞殿　若林正存殿　飛鳥井幾太郎殿
影山堯雄殿　栗原旭法殿　濱島智信殿　龍門通存殿　守屋貫教殿
金子光和殿　久富孝順殿　清水文亮殿　影山佳雄殿　坂井泰旭殿
新居貞太郎殿　大塚文亮殿　和田友正殿　宇都宮日綱殿　穴山日正殿
立正大學殿　中島良存殿　八木文丞殿　森本日霑殿　島田堯存殿
飯田惠晉殿

（次第不同講師）

上記諸君は此篇編輯刊行に際し、種々賛援と激勵とを賜りたり。謹みて芳名を錄し、永く感謝の意を表す。

昭和十五年一月廿九日　林竹次郎　脇田孝二　最上堯雅



昭和十五年三月一日印刷
昭和十五年三月十日發行

編輯兼發行者　東京市瀧野川區田端町一〇五　林竹次郎
印刷者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一二　青木定次
印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一二　大日本印刷株式會社

900
64

終